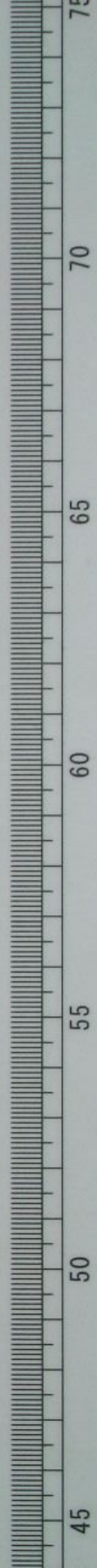




中朝文鑑

三

利
99
4



利
99
卷 4



本朝文鑑第六

序跋類



其付衣序 志心乃向序 一居序 觀音憑座序
柔合序 千句跋 瑞鴉集跋

對句類

花鳥對 影法師對

本朝文鑑

Handwritten title or header in Arabic script.

Handwritten text in Arabic script, possibly a date or reference.

Main body of handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines.

Handwritten text in Arabic script, appearing as a separate section or entry.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

Small handwritten text on the left margin of the bottom page.

Small handwritten text on the left margin of the bottom page.

帝鴉住跡

蓮三尾

一巻一箇如老人の老とるくはちまよ行み一葉の
 序より帝鴉のこころとくひし路の序の書とるを
 つつとゆふらばの心のはるある一葉とるを
 のちとるをこころの心は梅柳の心は
 ちくちくものこころとあつた牡丹の心は
 今年の花のまにまに一葉とるを
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は

秋を初秋の心は梅柳の心は梅柳の心は
 よつり観たる二葉の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は
 藤もねるも秋の心は梅柳の心は
 新芽の老とるは梅柳の心は梅柳の心は
 梅柳の心は梅柳の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は
 こころの心は梅柳の心は梅柳の心は

ありては、始と人、まき、か、あ、い、り、ひ、さ、の、ま、と、の、
ま、り、し、あ、り、て、海、よ、き、く、の、光、を、ま、り、し、

和云北路ノ専用ハ四季ノ各月ヲ配ルニ妙アリ誠ニ事ノ
文法ハ北選ニモ教多チカラ何レモ一傳ノ差別アリテ其等ヲ
文鑑ノ文鑑ト見ルハレシモハヤ四序ニ年ニ心ノ二子ヲ四目ヲ
春ハ今年ノ光ト云イ夏ハ昔ノ光ト云イテ秋ハ光ヲ
之心スト云ル其光ノ觀ハ北所ニシテ前ノ書、類ニモ云、
冬ハ燒火ノ更ナルニ水、火ノ向ノ妙絶光煤掃ノ對ノ觀即ん此ヤ
春待ノニ子ヲ以テ年ノ光ト云イ、七、縦ハ、横ノ自在
ヲ、結、ス、レ、但、レ、此、を、ハ、農、ノ、輪、ハ、佳、ス、先、師、ト、所、録、ノ、末、ナ、リ

同類

花鳥對

東花坊

霞都ねはよせし天地あり陰陽あり男あり女あり
美のありふに、さ、さ、さ、父、子、の、因、の、あ、り、た、ら、と、夫、婦、を、情、の、
ぬ、ま、に、ま、り、て、ま、さ、と、と、し、さ、さ、さ、舞、の、さ、さ、さ、依、
お、さ、よ、の、い、ひ、あ、ん、ま、い、ん、舞、さ、さ、り、し、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
ゆ、て、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
花鳥の林よきとて、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
花鳥の林よきとて、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

花鳥の類は名と色を以てて其の好むものありて
 ちよて柳の如きの止處はもたれりて風の歸せし
 ももねむむ娘のふよふれりて君がはらふのまよと
 ちや上路の山姥しやちんりわきの浦人よん
 ちよとては手にむもふのふたやんやんめむ
 ね云此類は宋玉カ對向ヨリ條ハ理ハ廣共兼ナト
 鳥獸松竹ノ對ニ效ヒテ先ハ花鳥ニ字ヲ題セル本朝
 風雅ノ納面ニシテ先向イ先對フキ物ニラヤ但レ對向ノ
 文法ハ理論ヲ後ニシテ文章ヲ先ニセル委曲ハ百尾ノ題註ニ
 在リテモ設論ノ虚無ヲ知ルヘシ

夫ハ向者ハ天地陰陽ヨリ君臣父子ノ五倫ラ云イ其ヨリ詩ヲ
 連佛ニ花鳥ノ後々情ヲ論シタルカ或ハ花モ盛盛トハ例ノ物語
 詞ヲ借ワテ花ニ今宵ハ古キノ意ヲ取リ或ハ秋ハ花
 ニ冬ハ花鳥ト云キテ啼ト嘆トニ數回各シテ互見ハ法ノ自在
 凡レシ或ハ菊ニ一啼トハ佳音ノ事ノ詞ナカラ世ノ耳ナレ又
 花鳥ト云イナレ殊ハ秋冬ヲ錯綜シテ之ニ句讀ノ用ヲモ
 知レシ或ハ詩人ニ早嘆トハ江南ニ枝ノ梅ヲ借テ一鳥不鳴宵
 儘ト云ル古詩ノ詞ヲ取合セタルハ花ト鳥トヲ指シ宜可セテ
 是ラ一時ノ偏ト云ヘ但レ我々ノ花鳥トハ折鶴ヲ冬季ナセル
 蕉トニ新式ノ條ナリ或ハ冬ノ三葉覺トハ三葉呂ロ歌ニ奇

セテ千鳥ニ花ノナキ古又ラ云リ或ハ硯海筆林トハ對者ノ胸ノ
博達ニ喩テ向者ノ心ノ如ク論セヨトナリ

去レハ對者ハ君父ノニ子ヨリ昆才明カハ互偏ニテ強テ染ノ
花鳥ヲ論セス先ハ情ノ花鳥ヲ表スヤヨリ語を連枕ニハ

染情ノ先後ヲ知トナリ或ハ雖鳩鴉頤ハ和漢ニ詩ナリ證
文ナルハ雲表折ラ詩純周南ニ對シテ鴉鴉ノ故云又ハ別ク

去レトハ雲ノ後ニ寄ハ夫婦同居ノ混在トハ鴉鴉ノ古又ニ取合
セタル文三章ノ自在ヲ稱ス一ク又三章ノ博達ニ致ス一レ或ハ

詩花ニ寄鳥トハ漢文ニハ詩ヲ取セ花濡地ト云ク後章ニハ
初陽毎朝来ト啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩ナリト云

詩種トハ雲トノ結文ナルラ見ルヘシ或ハ兄弟ノ花鳥ハ唐詩
伽諾ノ美格ヲ用イ或ハ明カノ花鳥ハ實地ニカ言ノ語

脈ヲ成スむモ一樹ノ備ヨリ例ニ唐毎々ノ所用ヲ知ルヘシ
或ハ梅ニ管カトハ秋ノ子ハ對者ノ詞ナレハ此子ヲ得リテハ讀

一カラス或ハ西方野モ相坂モ總テ古詩ノ詞ナラ芳野ハ
花ノニ子ヲ云イ達坂ハ鳥ノ子ヲ云ハル是ラ隱見ノ法ト云

次ニ春ニ立ノニ子ハ忠峯ヤ寄ヨリ杜詩ノ春寒氷雪ヲ
言メテ 管花ノニ子ノ時節ヲ云ル例ニ和漢ノ博達ナリ或ハ

春モ之數實トハ重々食ノ詩ノ四句體ヨリ和漢ノ節ニ遠
ヲ云イテニ雲ニ寄ルハ郊花ノ云イカケナカラコトハ四句體ノ外心

三巻ラ云一り或ハ獅子ニ牡丹ノ續キハ牡丹モ春命夏ノ意同
アハ和漢ノ論ノ序ヲ借ツテ天竺ノ花鳥ヲモ云イセリ
但シ詩ト云イ鑑ト云イテ一年一月ノ意ヲ對セル牡丹ノ
上ノ名語ニシテ况ヤ花命ノ筆法ヲヤ然ルヲ運ニ由ル
ト云イ伽陵ノ花ノ運ニウケテ秋夜夢踏靴ノ詩ヲ念口
總テハ花鳥ノ縁語ヨリ總テハ其名ヲ云イテ配ル總テハ
諸路ノ新結アル一子一言ノ粉骨ヲ称スレ或ハ擗ニ數馬
ト席ニ紅雲ノ一對ハ先ハ倒将衣ノ格ナカク全ク互意對
ノ奇絶ニシテ景瀛モ再ヒ日本ヲ答メテ倭文ニ此等ノ
法格アリト信スレ然レハ浮世又其衛ハ天津繪ノ之相ニ

狩野右法眼ハ彩色繪ノ先達ト云イトセリ或ハ唐様ニ唐風トハ
一ハ中ニ和漢ノ剛柔ヲ對シテ中間ニ心ノ花鳥ヲ結語セル也等
ニ文章ノ時ヲ知レシ或ハ物ニ好惡トハ強テ一論ヲ設テ
内ニハ連音ノ弟弟弱ラユク外ニハ能語ノ活計ヲ云ハ柳ニ鶴モ
豆ニ鳩モ能ニ能語ノ筆格ナカラ一ハ能ノ撰様ノ短語アル
或ハ粟ニ麩トハ食ラ求ル類ヨリ花ニ鳥ノ用アルヨリ竹
ニ雀ノ無為ナラシハト云イ世法ノカラ儀タル誠ニ文章ノ厚薄
ナカラシハ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ竹籠ト云イトセル何レモ詩者
ノ詞ヲ借テ冬ノ花鳥ノ風情ヲ附タル也等ハ画心所屬ト云
或ハ菊ニ餅花トハ春行宿ニ春ヲ待ツト云ハル結前生後ノ

花鳥正八奉ヨリ正月ノ祝詞ヲ係テ氣ヲ極カ右ト云ヨリ花
一字ハ折節ノ風流ナラシムルハ對向ノ結語ハ古人モ多ク祝語ヲ
用イテ當代ノカ歳ラムリケル多ク山姥世浦人モ總テカ君ハ
東ニツイテ心ノ花鳥ニ和キタル花會亦在ノ結文ト云レ但シ
此處ハ假名ト真名トニ各一テ極メ庵ノ遺稿ニ留ラレカ今ハ
真名字ヲ加ルニ及ハス讀者ハ必モ通用ヲ請ニスレシ

影法師對

榊木因

老のそち 鏡の中へ又くく
誰何やぬ然とさくさくしり 予は白髪をとりて

とけよよ 汝何人あねれ 我は白櫻下へまかり 我と對一
座を や彼は白髪をとりて 我は白櫻下へまかり 我と對一
我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
此の七夜は 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
さくさく 何ぞ我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
七夜は 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
何ぞ我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
計りよ 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
の柳は 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり
花は 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり 我は白櫻下へまかり

大月天盤

二二

きりけりけり心とまゐりて一論は勝おらりてと云
と云ふやけりのふ註と云ふにきりけり骨切と云ふ識
あしと云ふやけりやけりや隠士の境裏の世向のやけり
きりけりやけりのふ註と云ふにきりけり
えりや一の縁をのり分別

ねむ北條柳八白櫻下ニ談は毫ノ模様ニシテ拾ニ年尾ノ句ヲ出シ
統リ三九ノ句アルヨリ休有ハ是ヲ回文格ト題セル誠ニ傳文
ノ一格ナルヲ今ハ選ニテ對向類ニ加フ去レハ白櫻ノ對論
並ニ窮ノ言語ヲ争ヒテ巴ノ危石ニ次断セル鏡ノ影ノ差別ハ
分明ナリ去ルハ漢文ノ設論ニモ勝レテ一筆柳ニテ八箇ノ彼哉

ノニ子ヲ要ムをモ曲折徑遠ノ所ナルニ况ヤ泡影ノ論ヲ誰シテ
結文ハ我ト我心ヲ書スル急ニ笑中ノカヲ用イテ文ニ虚實
ノ自在アリト称スレシ但シ作者ハ濃西ノ大垣ニ産シテ谷氏ノ
隠士ナリ白櫻下ノ三才ハ下ノ称号ナリト

本朝文選才七

辨類

后眠辨 柳化辨 竹兔辨 自得辨 梅長者辨
巴了 豐枝辨 招急心辨

說類

鮑上人說 名十哲主說 櫻島人說 名說
名二子說 論師說 遠語說 江詠事說

頌類

嵩寺地頌 不懲名頌 猶德頌
招百耳頌

本朝文選

卷六

ふらりきりけり他はよ通存くして今光のよれ辨
あつたけらのちうとよらるるてんてんてんてん
るや海は川流の上達し智徳の局たるありて凡々に
知ふと忘れりんてんてんてんてんてんてん

れ云世難捷躑ニシテ人ヲ誨ユルニ文アリト云レシ去ニ廉亮自縁
ハ遺教経ノ趣向ニ其人ヲ四人ニ諭スル最後ニ子ニ好辨
トシテ况ヤ虎子ヲ辨明シテ彼カ上下ニ去リ書ヒスル例ニ依テ
筆格ヨリ虚實ハ二篇ノ趣意ナリ但シ天下村ハ福居ノ西ニ

自得辨

北七

はくく世累のわまところふは脈と毒あれたる
るふなくは月と骨あふも買人かちあふ
河脈と毒あふ龍宮の割れよのてれてけり
てんてんてんてんてんてんてんてんてん
かふてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてん
白雲ひらけ月のあふりてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてん
木綿の布子もてんてんてんてんてん
るれことてんてんてんてんてんてん

「ふらあふらあはねのこいひいふ隠逸の人の懐けり
 せよあふらあはねのこいひいふ隠逸の人の懐けり
 景報の園（註）とて得たあふらあはねのこいひいふ
 飯汁の酒月とて得たあふらあはねのこいひいふ
 の腹が懐入本花のあふらあはねのこいひいふ
 へちまのあふらあはねのこいひいふ
 もつりふくまのあふらあはねのこいひいふ
 くまのあふらあはねのこいひいふ
 自得のあふらあはねのこいひいふ
 ね云世辨ハ在子ト意地ナカラハ全ク他語ノ筆法ナリ是ハ両面

前より自得の意意ヲ合成是等の中ニ十二箇ノ面ヲ用いて
 春秋ノ箇ニ二箇ノ面ヲ用いて又ニ互照之法アリト云ハ然レ
 四季ノ詞ヲ重テ而ニ四季ノ情ヲ云イ後ニ四季ノ情ヲ云ル
 此等ハ文ノ体ト云レシ證シテ龍宮ノ制札ハ他語ノ人ノ常語
 ナカラ此篇ノ向、奇絶ト稱スレ但シ作者ハ越ノ新法ニ任ス
 北村ノ凡人ニシテ先師モ世帯ヲ稱合セリ

梅丘者辨

井去重二平

「早の梅丘者辨とてひきまてしや隣人梅と括て梅と
 梅の丘とありて、お梅とも梅の丘（お）よやま〜梅の丘

變の支やうあつて。但し満足の子やうにけしきつゝの
一の福と称とてけしきと満足あり一

何云世説ハ満足ニ子ヲ以テ主ノ名トナセルモ満足ナト
評カケテニ蘇亮カ説ノ汝子ヨリ一篇ニ子ノ汝ヲ用ルニ
文章ノ意地ハ各別ニ世等ヲ撫育ノ法ト云ハシ誠ニ始ルハ喃
但云カ後ハ朝ノ暮ヲミイ居ルハ硯ハ利鈍ヲ云ハ竹田ハ俳諧ノ
筆格ナリ但シ世々越ノ瑞泉ニ住テ應山人ハ標号ナリトフ

櫻商人説

永亨中

年とえ祿の辛己よりん東西お話の選場一評痴の巻に

おれらと悔いてけしきと此年にてお話けしきとけし
北華坊の巻とありて安宅の角と題しとて一巻と
勤進帳の詞とけしきと其詞一

世亨中よりあめのこと富国やねの風雅くうて
蕉行の心とてあめことまじき西お話の都
とてらけしき世の世念とまじきけしきと
福山家の巻とありて櫻商人の巻ありと
一とて評とてけしきと中とてけしきと
おれらとけしきとあめことまじき世の世念
の巻とてけしきとけしきとけしきと

の之 腹中さくわけの併に依り、并料く
 之付し箇をとり仰はし、上の腰をふと、四つ子橋山依
 へえん程の五虎井上御殿ふあり、橋のふ橋よひの
 旅よりたのめると人々呼ばるるを、今此橋商人
 といふ高し言さるる商人ありや、橋とあまふ高人
 御后の御まことかくしけりといふ、出れし橋を
 歸められたるこの山依も、これ商人も作のまよし有
 といへり、此後の謎とかまされて肉のくく、い願
 犯云世説へ説の面にて、虚誑三人ヲ論破スト云レシキハ
 五虎井ノ繪殿別上先師北國ノ首途ニ許六早ノ種孫

野田の橋ノ旅次ヲ繪ヤキ一軸ノ巻物トナセし撰
 其レヲ題号ナリ然レテ世題ノ名ニ寄セテ行者ノ手帳
 二ハ格式ヲ題ハレテノ子ニハ説体ヲ尽セル誠ニ又ニ
 棧録ヲ得テ北陸ニ此作者アリト録スレ但し其姓未
 ニシテ北を坊ハ其撰ノ假名トナ

各説

度部記

其らにる武士といふるあり、今さらある 歴あるといふあり
 といふあり、あまふ 東華坊といふ西のあり、あまふ 西華坊と
 といふ華字より先也、後也 といふ説のま訓とある

